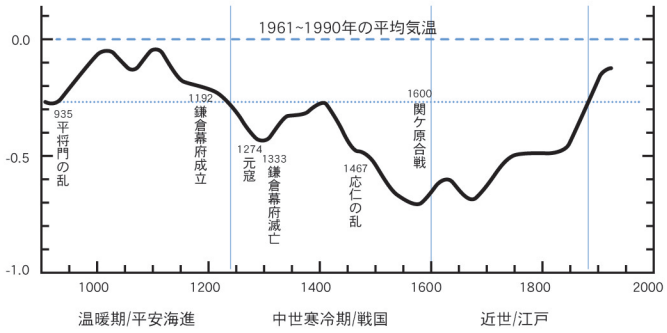
◆関八州の自然基盤構造

風系

中世の気温は現代よりも寒冷だったとみられている。気温には変動の波があり、縄文時代には現代より気温が高く、関東平野は内陸まで海が入り込んでいた。その後、弥生時代には寒冷化して海退し、平野が広がり、水田が拓けるようになった。平安時代は一旦温暖化して湿地帯が広がった。平安末期から火山活動が盛んになり、中世は気候が寒冷化して飢饉が頻発し、社会が乱れた。



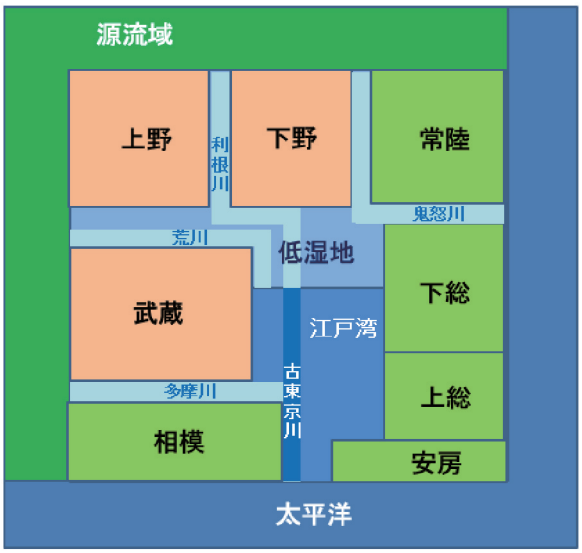
（IPCC第4次報告書より抜粋加筆）

水系

中世関八州の水条件を右図に表した。各国は大河川で大きく仕切られて、外洋に面する 5 国と山地を背景とする 3 国とに分かれる。5 国は東海道つながりで、3 国は東山道でつながる。内湾の江戸湾に面するのは 5 国だが、武蔵国は江戸湾にのみ面する。江戸湾には古東京川の旧川筋があり、航路となっている。その終点は横浜あたりで、湾奥は遠浅で河口付近は大低湿地帯となっていて大舟は入れない。

古東京川：2 万 5 千年ほど前、利根川、荒川、多摩川を束ねていた。江戸湾はまだ陸地で古東京川は深い谷を刻み、浦賀付近で太平洋に注いでいた。

鬼怒川：銚子で外洋に注ぎ、下流域は広大な水郷地帯を形成。江戸時代に鬼怒川の流路に利根川が付け替えられた。

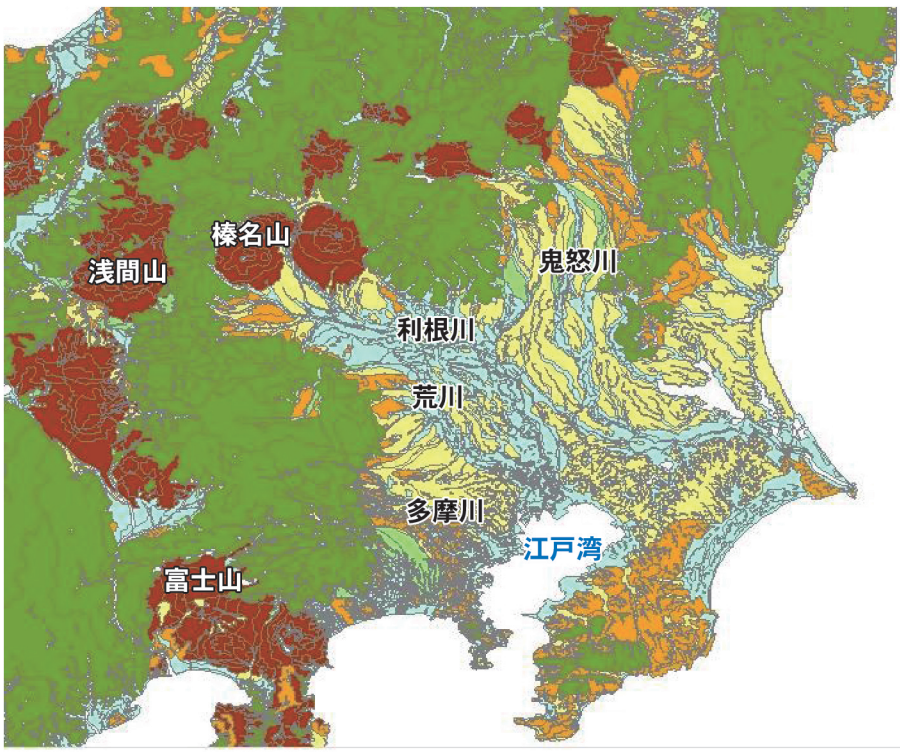


土系

関八州は全国一の関東平野を有し、全国一の流域面積の利根川が流れ、全国一高い富士山で西縁を仕切られている。江戸湾も全国有数の深い入江である。北西には浅間山、榛名山があり、碓氷峠が信濃国との境界となっている。北は白川関の先が陸奥国となる。

富士、浅間、榛名の 3 火山はしばしば大噴火を起こしている。地震も多く、津波被害も相模国などで起きている。一方で鉱物資源に恵まれ、武具生産も盛んになった。

広大な関東平野は、農業土壌条件にも恵まれ、丘陵部では牧も多く立地した。



地形地質図（現代）

中世の海岸線ラインは現代と異なる